

湖南への社会主義思想伝播に関する一考察

清水 稔

1. 問題の所在

中国において社会主義やマルクスらの学説に関する知識が本格的に受容されはじめたのは20世紀初頭のことであり、初期におけるそれは、多くは日本の近代社会を通して受容された。当時の中国人にあって、日本語から移された新しい言葉は、たとえば社会主義という言葉はもちろんのこと、社会、国家、国民、自由、平等という言葉ですら、まったく耳慣れない言葉であったために、何はともあれ、まずそれらの言葉の解釈から考えねばならなかった¹⁾。したがってここでとりあげる社会主義という言葉にはさまざまなニュアンスが含まれている。マルクス主義もあれば、国家社会主義、キリスト教社会主義、社会民主主義もあり、また無政府主義や虚無党すらもそのなかに包含されている。つまり当時の社会主義とは、資本主義の弊害を客観的であれ主観的であれ克服することをめざした、総ての主義・主張を含みこんだ概念として認識されていたのである²⁾。

1) たとえば『浙江潮』第2期、第6期をみると「新名詞解義」として社会 (Society)、国家 (State)、帝国主義 (Imperialism)、孟魯主義 (Monroe-doctrine) の解釈が掲載されている。

2) 社会主義という言葉を資本主義から共産主義への過渡期とそれに照応するイデオロギーという概念＝マルクス・レーニン主義としてのみ使用されたわけではない。小論のテーマにかかわる研究書として、広東省紀念馬克思逝世一百周年學術討論會論文集編選小組編『馬克思主義在中國〈広東省紀念馬克思逝世一百周年論文集〉』（広東人民出版社、1983年）、中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編訳局馬恩室編『馬克思恩格斯著作在中国的傳播〈馬克思逝世一百周年〉』（人民出版社、1983年）、北京図書館馬列著作研究室編『馬克思恩格斯著作中訳文総目』（書目文献出版社、1983年）、丁守和・殷叙彝『從五四啓蒙運動至馬克思主義的傳播』（生活・読書・新知三聯書店、1963年、再版1973年）、陳漢楚編著『社会主義在中国的傳播和实践』（中国青年出版社、1984年）、狭間直樹『中国社会主義の黎明』（岩波書店、1976年）、石川直禎「マルクス主義の傳播と中国共産党の結成」（狭間直樹編『国民革命の研究』京都大学人文科学研究所、1992年）等がある。そのほか資料集として姜義華編『社会主義学說在中国的初期傳播』（中国近現代思想文化史史料叢書）（復旦大学出版社、1984年）、葛懋春・蔣俊・李興芝編『無政府主義思想資料選』上下〈中国現代哲学史資料選編〉（北京大学出版社、1984年）等がある。小論の作成にあたり、これらの先学の研究に負うところはきわめて大きかった。記して感謝の意を表する。

小論では、中国で社会主義やマルクスらの学説に関する知識が受容される過程のなかで、湖南がどのような位置を占めていたかについて、辛亥革命期から五四運動期を中心に素描することにある。

2. 辛亥革命期について

西洋を認識する転換点となったのはアヘン戦争（1840-42年）であり、その当事者であった林則徐は西洋事情についての情報収集を自覚的に起こった最初の人である。しかし外国の文献が本格的に翻訳され紹介されるようになるのは洋務運動期で、それは総理事務衙門（外務省）に付設された京師同文館（外国語学校、1862年）や上海に創設された広方言館（同前、1863年）³⁾等において通訳の養成や翻訳事業が開始されてからのことである。そこでは「中体西用」論にもとづき、西洋の進んだ科学技術を習得することのみが重視された。その考え方は日清戦争（1894-95年）による敗北によって批判をうけ、やがて優れた科学技術を作り出した西洋の文化・社会・政治に目が向けられ、変法派による立憲改革運動を生み出した。かれらは日本の明治国家のなかに西洋の近代思想の成果を見出し、それをモデルとして中国の改造をおこなおうとした。その意味で変法派の登場は西洋近代の政治思想の受容を容易にしたといえる⁴⁾。またかれらのおもな政治行動はジャーナリズムによる啓蒙活動にあった。その中心は梁啓超であった。かれは、変法期にあっては上海で刊行された『時務報』（旬刊、1896年8月-98年6月）、亡命後には日本の横浜で発行された『清議報』（旬刊、1898年12月-01年12月）と『新民叢報』（半月刊、1902年2月-07年11月）等によって、民智を開くために平易な文章で、西洋近代の政治思想や科学的な知識などを精力的に紹介した。これらの雑誌は、義和団事件を契機として急増していった留日学生

3) 1870年に江南製造局に編入され、翻訳館となる。

4) 西洋の近代思想の受容に先行して、当時すでに進化論、社会進化論が一世を風靡しつつあった。各種の進化論、社会進化論がいろいろな経路で受容された。そのなかでも1898年に嚴復がトーマス・ヘンリー・ハクスリーの *Evolution and Ethics* (1893年) を要約（中国語訳）して発表した『天演論』は、「物競（生存競争）」「天沢（自然淘汰）」「優勝劣敗」をテーマとしたもので、日清戦争の敗北に国家の危機を痛感していた中国の知識人に大きな影響を与えた。変法派は、当時儒学の主流であった古文学派に対して今文学派に立ち、かつ『春秋公羊伝』にいう三世説にもとづいて発展史観を説いた。それが社会進化論と結びつくことによって、変法派のいう専制から立憲君主制への移行は発展であるだけでなく、優勝劣敗・適者生存による必然と認識しえたのである。なお『天演論』・進化論については、佐藤慎一「『天演論』以前の中国の進化論」（『思想』第792号、1990年）、高柳信夫「『天演論』再考」（『中国哲学研究』第3号、東京大学中国哲学研究会、1991年）、坂元ひろ子「中国民族主義の神話」（『思想』第849号、1995年）等に詳しい。

が新思想とりわけ西洋のブルジョア政治学説を受容するうえで大きく貢献したのである⁵⁾。

ところで1902年から03年にかけて幸徳秋水の『二十世紀之怪物帝国主義』（警醒社、1901年）の中国語訳（同名）が上海の通雅書局から⁶⁾、島村満都夫の『社会改良論』（静修館、1900年）と福井準造の『近世社会主義』（有斐閣、1899年）の中国語訳（同名）が上海の広智書局からそれぞれ出版された⁷⁾。これらの翻訳はすべて湖南常德の趙必振によってなされたものである。幸徳秋水の著作は日本を含む世界の帝国主義を鋭く分析し批判するなかで、それに対処するために世界的大革命の運動を開始して、少数の国家、陸海軍人の国家、貴族専制の社会、資本家横暴の社会から、多数の国家、農工商人の国家、平民自治の国家、労働者共有の社会に変革することをよびかけ、科学的社会主義こそが野蛮的軍国主義を滅ぼし、^{ブラザーフード}四海同胞の世界主義こそが略奪的帝国主義を掃討できるとした。その意味で幸徳のこの翻訳書は、近代の湖南人がもっともはやく科学的社会主義について言及したものといえる。また福井の著作は、本文だけで500頁におよぶもので、欧米各国の社会主義者の生涯やかれらの著作・学説、各国の社会党の活動状況等が比較的詳細に述べられている。とくにその第2編第1章ではカール＝マルクス（中国語訳は加陸・馬陸科斯）の生涯とその学説を詳しく紹介し、マルクスを「一代の偉人」「新社会主義の創立者」と讃え、その著作『共産党宣言』（エンゲルスとの共著、1848年2月）を「一大雄編」、『資本論』（第1巻初版は1867年7月）を「一代の大著述」と称讃している。出版史の著名な研究者として知られる張静廬氏は、福井のこの翻訳書を中国でマルクスの学説が紹介されたもっともはやい著作であると指摘している⁸⁾。

5) 日本に留学した中国人学生が、日本での生活を通しておもにどのような新思想を受容したかについては拙稿「中国人留学生と日本の近代」（『佛教大学総合研究所紀要』第2号別冊「アジアのなかの日本」、1995年）を参照のこと。

6) 張静廬輯註『中国近代出版史料初編』（群聯出版社、1953年）の「辛亥革命書徴」では「1902年刊」（174頁）とあるが、その注④では沈兆禔の『新学書目提要』を引いて「1903年刊，上海通雅書局」（183頁）と記している。通雅書局の実態は詳かではないが、この書局では、このほかに徳富蘆花の『鉄血主義』、田辺朔郎の『俄国之勢力図』という訳本を出版している（張静廬輯註，同前書，174頁，178頁）。なお幸徳の中国語訳は未見である。

7) 広智書局は、1902年に保皇派が海外華僑から集めた資本金10万円で上海に設立したものである。梁啓超の主持のもとで、訳書の刊行等で清末に大きな役割を果たしたが、1915年に停辦した（丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』上海人民出版社，1983年，730頁）。「辛亥革命書徴」（張静廬輯註『中国近代出版史料初編』同前）140-183頁，「開国前海内外革命書報一覽」（馮自由『革命逸史』第3集，台湾商務印書館，1965年）139-159頁。なお島村の中国語訳は未見であるが、福井の中国語訳の一部は姜義華編『社会主義学説在中国的初期伝播』（前掲）79-222頁に収録されている。

8) 張静廬輯註『中国近代出版史料二編』（群聯出版社，1954年）429頁。

これらの著作を翻訳した趙必振とはいかなる経歴の持ち主なのであろうか。杜邁之・劉決決・李竜如編の『自立会史料集』（岳麓書社、1983年）には、趙必振の筆になる「自立会紀実史料（節略）」（全稿本は未刊、湖南図書館蔵）とかれの補筆にかかる「自立会人物考」⁹⁾が収録されている。『自立会史料集』の編者は、その編著のなかで趙必振の経歴について次のように記している¹⁰⁾。

趙必振（1872-1956年）、又の名は震，字は生。湖南武陵（常德）の人。常德の徳山書院，長沙の湘水校経書院の学生。1900年同郷の何来保とともに自立軍の蜂起に積極的に参加し，常德方面における自立軍の組織工作を担当した。自立軍蜂起が失敗したあと，湖南巡撫俞廉三の逮捕命令を逃れて香港へ脱出，香港では『商報』の刊行につとめる。イギリスの帝国主義政策を批判した論著のために，香港イギリス当局に追われ，日本に亡命した（1902年旧暦3月）¹¹⁾。横浜で『清議報』『新民叢報』の校訂や編集等の仕事に携わり，「必振」「民史氏」等のペンネームで活躍した¹²⁾。湖南出身の秦力山や陳天華，章炳麟らと親密な関係にあった。また日本語の翻訳にも従事し，訳書は30余点にのぼった。1912年北京へ。同年熊希齡（熱河都統）とともに熱河に赴き，都統署秘書長，財政庁長等を歴任した。解放後は湖南文物委員会委員・湖南省文史館館員となった。

ここから趙必振が変法左派の自立軍蜂起においてその一翼を担い，日本に亡命後は梁啓超ら保皇派の雑誌の編集に関与し，辛亥革命直後には立憲派の熊希齡（湖南出身）と行動をともしたことがわかる。ところで1902年の『新民叢報』の創刊を契機として，1902年から04年にかけて留日学生を中心にさまざまな雑誌（湖南出身者による『游学訳編』，直隸出身者による『直説』，『湖北学生界』，『浙江潮』，『江蘇』等）が日本で刊行され，それらを舞台にして清朝に立憲の夢をかける改良派と清朝打倒を旗印とする革命派が熾烈な論戦を展開していったことは周知のことである。趙必振の先の翻

9) これはもともと『湖南歴史資料』1958年2期に収録されていたものである。

10) 『自立会史料集』33頁。かれの経歴の一部は，同前の史料集に収められている趙必振の伝略（82頁）によって補足した。なお註9）の『湖南歴史資料』所載の「自立会人物考」の編者の解説（84頁）によれば，趙必振の原名は廷駁とある。また張静廬輯註『中国出版史料補編』（中華書局，1957年）によれば，かれにはほかに『自立会志士事迹略稿』（北京図書館蔵）の著書がある（197頁）。

11) 『游学訳編』第10期（1903年9月6日）の「湖南同郷留学日本題名」には，1889年から1903年までの湖南人の留日学生208名の名簿が掲載され，年齢，出身県，来日した年月，官費か自費かの別，留学先の校名が記されている。これによると趙必振は「22歳，武陵常德，壬寅（1902年）3月，自費」とある。なお『自立会史料集』（同前）82頁の伝略によると，香港の記述はなく，「自立軍蜂起の失敗後，澳門にのがれ，のち日本へ行く」とある。

12) 『清議報』第84冊（同年7月6日）に「何烈士来保伝略」，第85冊（同年7月16日）に「蔡烈士鍾浩伝略」，第89冊（同年8月24日）に「漢変湖南烈士小伝匯編」の投稿記事がある。

訳はこうした状況のなかで生まれたものである。

当時、社会主義やマルクスらの学説を紹介した著作は、趙必振の翻訳本のほかにも、数多く日本語の文献から翻訳されている。そのいくつかを紹介しておこう。まず1902年には、幸徳秋水の『広長舌』〈中国国民叢書社訳、上海商務印書館〉（原著『長広舌』、人文社、1902年）、1903年には村井知至の『社会主義』〈羅大維訳の上海広智書局版と侯太縮訳の上海文明書局版〉（原著同名、労働新聞社、1899年）、島田三郎の『社会主義概評』〈作新社図書局訳、上海作新社〉（原著『世界之大問題社会主義概評』、警醒社、1901年）、大原祥一の『社会問題』〈高種訳、閩学会〉（原著同名、秀英舎、1902年）、西川光次郎の『社会党』〈周子高訳、上海広智書局〉（原著同名、内外出版協会、1901年）等が刊行された。1904年以降11年にかけては、その数は激減し、金一（金天翮）訳『自由血』〈競進書局、1904年〉、冷血（陳冷）訳『虚無党』〈開明書局、1904年〉、江西一青民編『虚無党女英雄』〈上海、1905年〉、骨性館主人訳『虚無党真相』〈上海広智書局、1907年〉等のように虚無党関係の著作が増加している。そのなかにおいて1907年に幸徳秋水の『社会主義神髓』〈蜀魂遙訳、上海広智書局〉（原著同名、朝報社、東京堂、1903年）が翻訳刊行された¹³⁾。

このような単行本として刊行されたもののほかにも、前述したような改良派や革命派の雑誌にも、各種の社会主義やマルクスらの学説を部分的に翻訳したり紹介したりした記事や論考が多く掲載された¹⁴⁾。当時日本にいた中国人留学生は、実藤惠秀氏によれば1903年が1000名、1905年3000名、1906年8000名、1907年7000名であったといい、そのうち湖南出身の留学生は、『湖南省志』第1巻によれば1904年の留日学生2395名中373名であったという¹⁵⁾。また『游学訳編』第10期所収の1898年から1903年の湖南籍の留日学生名簿（208名）によると、1902年の来日が52名、03年の来日が106名、そのうち33%が弘文学院（1901年1月創設、校長嘉納治五郎）、13%が振武学校（1903年7月創設、陸軍参謀本部付設）に在籍した¹⁶⁾という。これらの数値はあくまでも正規の留学生のものであり、実数はこれをはるかに上回っていたと考えられ、楊世驥氏によれば、1904年の湖南籍の留日学生は1000名を下らなかった¹⁷⁾としている。いずれ

13) 以上は「辛亥革命書徴」（張静廬輯註『中国近代出版史料初編』前掲）140-183頁、「開国前海内外革命書報一覧」（馮自由『革命逸史』第3集、前掲）139-159頁等による。

14) 詳細は狭間直樹『中国社会主義の黎明』（前掲）を参照のこと。

15) さねとうけいしゅう『増補 中国人日本留学史』（くろしお出版、1970年）付表544頁。なお拙稿「中国人留学生と日本の近代」（前掲）120-121頁参照。湖南省志編纂委員会編『湖南省志』第1巻〈湖南近百年大事紀述〉（湖南人民出版社、第2次修訂本、1979年）239頁。これは『清国留学生会館第五次報告』によるものである。

16) 註11)に同じ。

17) 楊世驥『辛亥革命前后湖南史事』（湖南人民出版社、1982年）99頁。

にせよ、かれら留日学生を通じて先の雑誌や翻訳本が中国へ、さらには湖南へと大量にもたらされることになる。たとえばそれを革命の4大パンフレットを例にとると、湖南革命派の重鎮黄興は、1904年旧暦夏5月日本から湖南へ帰る途中、武昌に立ち寄り、携行した趙容の『革命軍』、陳天華の『猛回頭』あわせて4000部を軍学界に頒布したというし、同じ頃帰国した湖南新化の留学生楊源濬も、7000部の『猛回頭』を東京から持ち帰ったという¹⁸⁾。当時日本で刊行されたものが中国へ還流した一端を垣間見ることができよう。

1905年8月ブルジョア革命政党、中国同盟会が東京で結成され、各省に分会が設けられた。2年間で1000名余りの会員（東京での加入者は860余名）を擁し、そのうち湖南籍の会員は157名を数えた¹⁹⁾。一方、湖南長沙にあっては、黄興から湖南分会の設立とその機関誌『民報』（1905年11月-10年2月）の販売を要請された禹之謨は、分会の組織と『民報』の発売網を通じて革命派の結集と革命宣伝物の販路の拡大をはかった²⁰⁾。禹之謨のこうした反満の革命行動は、革命に殉じた陳天華・姚宏業の公葬（長沙）を強硬したり、塩の捐税反対闘争（湘郷）等を指導したりしたことともあいまって、1906年8月官憲による拘束をうけるにいたり、翌年1月処刑された。その罪名の一つが「孫文にそそのかされた虚無党の頭目」²¹⁾であった。為政者の側からその状況をみたものに、湖南候補道沈祖燕が政府に提出した湖南の学生の活動状況や「逆書」についての報告書がある。その概略を記しておこう²²⁾。

近年革命党人は、悖逆の説を倡えて、書物を編纂し、それが1904年の年には省内に流布した。友人のところでそれを見て大いに驚き、その出所を尋ねると、書店で購入したり、友人が送ってくれたという。そこで人目に触れないように粗末な服装で街にでかけて調査をし、並べられているものを手にとってみると悖逆の書であった。驚きで憤懣やるかたない思いである。ここにその書名を記す。

18) 劉揆一「黄興伝記」（左舜生『黄興評伝』〈伝記文学叢刊〉伝記文学出版社、1963年）186頁。曹亜伯『武昌革命真史』上（上海書店、1982年）自序、4頁。また楊世驥『辛亥革命前后湖南史事』（同前）によると、その後長沙府東街に帰国留学生張鎮衡・秦毓鎰・翁浩・鄭憲成らが民訳社を作り、『猛回頭』等を秘密出版した（112頁）という。なお小野信爾『辛亥革命と革命宣伝』（小野川秀美・島田虔次編『辛亥革命の研究』筑摩書房、1978年）はこの状況をヴィヴィッドに描いている。

19) 「同盟会成立初期（乙巳丙午兩年）之会員名冊」（中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会『革命文献』第2輯）による。

20) 「丙午靖州禹之謨之獄」（馮自由『革命逸史』第2集、台湾商務印書館、1965年）。なお禹之謨の革命活動については中村義『辛亥革命史研究』（未来社、1979年）の「第3章 革命派の思想と行動」に詳しい。

21) 陳新憲・禹問樵・禹靖寰・禹堅白編『禹之謨史料』（湖南人民出版社、1981年）162頁。

22) 張篋溪「沈祖燕・趙爾巽書信中所述清末湘籍留学生的革命活動」（『湖南歴史資料』1959年1期）124頁。

『瓜分惨禍予言記』『現世政見之評訣』『支那革命運動』『瀏陽二傑文集』『瀏陽二傑論』『中国自由書』『野蛮之精神』『併呑中国策』『最近之満州』『新湖南』『蕩虜叢書』『新民叢報』『新民匯編』『新中国』『黄帝魂』『革命書』『猛回頭』『独立吟』『新小説』『広長舌』『清俄之将来』『支那化成論』『支那活歴史』『二十世紀之怪物帝国主義』『新広東』『浙江潮』『中国魂』『孫逸仙』『沈蕙』『熱血』『迷津宝筏』『醒夢歌』『多少頭顱』『仇満歌』『警世鐘』『革命軍』『清密史』『兄弟歌』『慘世界』『馬前卒』『自由旗』

ここに悖逆の書としてあげられているものの多くは革命派のものが多いが、譚嗣同・唐才常・梁啓超ら変法派・保皇派のものや幸徳秋水の翻訳本も含まれている。清末における新思想が、為政者の禁書の布告にもかかわらず、きわめて多様かつ複雑に絡み合いながら国内に浸透していった様子がうかがえる。

湖南の革命家宋教仁は、湖南の革命結社華興会による長沙蜂起計画（1904年10月）に参画して以来、1913年3月に袁世凱の刺客によって暗殺されるまでの32年間、『二十世紀之支那』（1905年1月創刊）、『民報』、『民立報』（1910年10月-13年9月）の主筆あるいは編集として健筆をふるった革命ジャーナリストであるとともに、同盟会・中部同盟会において卓越した革命戦略・戦術を展開した革命家であり、また歴史や地誌に造詣の深かった学者でもある。長沙蜂起失敗後の1904年12月に日本に亡命し、まもなく孫文らを迎えて革命派の大団結をはかる。その間、中国革命の協力者として知られる宮崎滔天や、日本へ亡命していたロシアのナロードニキ、ビルスドスキー（ピウツスキー）らとも親交を深め、社会主義のさまざまな学説や社会党に関する新聞、雑誌の記事や著作を幅広く集めて研究した。やがて『民報』第3号（1906年4月5日）と第7号（同年9月5日）に「1905年露国之革命」を『東京日日新聞』1906年2月5-12日号の記事から、第5号（同年6月26日）に「万国社会党大会略史」を『社会主義研究』第1号所収の大杉栄の論文から、それぞれ翻訳した。後者はマルクス（中国語訳は馬爾克）の『共産党宣言』を紹介し、第1、第2インターの歴史を概観している。また『民立報』1911年8月13、14日号に「社会主義商榷」の一文を発表し、世界の社会主義運動の発展と社会主義諸派の学説について詳しく紹介した。当時の革命派の機関誌であった『民報』は、保皇派の革命反対、社会主義反対に対する論戦のなかで、社会革命を不可避とする革命綱領擁護のために社会主義を掲げていたのである。したがって論戦をのぞけば、『民報』誌上における社会主義の位置はあまり高くなかった。社会主義やマルクス主義に関するものとしては先の宋教仁の訳稿のほか、第2号（1906年8月2日）、3号には朱執信が「德意志社会革命家小伝」を執筆し、

マルクス（馬爾克）やラッサール（拉薩爾）を取り上げている。とりわけマルクス伝ではマルクスの伝記の形をとりながら『共産党宣言』と『資本論』を紹介したもので、当時としては出色の科学的社会主義の解説といえる。第4号（同年4月24日）には宮崎民蔵稿・社員訳「欧美社会革命運動之種類及評論」があり、カール＝マルクス（カ瑪）・エンゲルス（殷傑）らの社会主義、バクーニン（巴枯寧）らの無政府党、ヘンリー＝ジョージ（軒利佐治）らの土地均有党の三派の社会主義を分析し紹介している。第7号には投稿原稿ではあるが、廖仲愷訳「社会主義史大綱」（W. D. P. ブリックスの A Hand Book of Socialism）、葉夏声訳「無政府党与革命党之説明」が掲載され、前稿ではマルクス（麦喀氏）を革命的社會主義者と讃えている。しかし第8号（1906年10月8日）以降は無政府主義や虚無党関係が多くなり、社会主義の紹介は誌面から姿を消している。それには編集者の交代とか同盟会活動の分裂状況が反映されている。

ここで中国社会党の湖南における活動について簡単にふれておきたい。中国社会党は江亢虎（江西省上饒の人）が1911年11月上海に創設した政党であり、思想的には無政府主義的、社会改良主義的、国家社会主義的諸要素が混在した不透明なものであった。そのメンバーには張継・李懷霜・殷仁・葉夏声らがあり、支部490余、黨員52万余を数えたという²³⁾。湖南省長沙ではその年の冬『湘漢新聞』²⁴⁾の社員らによって湖南支部が設立され、翌12年9月、江亢虎はかれらの招きをうけて湖南を訪問、マルクスの学説を含む社会主義各派の学説や源流について講演している。

こうした社会主義やマルクスの学説に関する文献についての初期の翻訳本や紹介記事は、その後の中国において真のマルクス主義を学習し、それを宣伝するための資料として蓄積されるとともに、当時盛んになりつつあった孫文らのブルジョア革命運動にも少なからぬ影響を与えた。当時のブルジョア革命派は、社会主義の革命に関する理論と実践から大いなる啓示をうけ、清朝政府と改良派を激しく攻撃する論陣をはったのである。宋教仁は先の「1906年露国之革命」の一文の翻訳後記（『民報』第7号）のなかで、「革命とはもっぱら暴動・暗殺・同盟罷工等すべての強迫力をもって政府に反抗することだ」と述べ、立憲派のように「いたずらに要求を主張するのみ」の請願運動に反対した。また当時の孫文ら革命派は、西洋ではブルジョア革命が勝利した

23) 朱建華・宋春編『中国近現代政党史』（黒龍江人民出版社、1984年）91-92頁。

24) 張平子「從清末到北伐軍入湘前的湖南報界」（『湖南文史資料選輯』第1集〈修訂合編本〉湖南人民出版社、1891年）70-71頁によると、1912年3月『大漢民報』の自主解散の後をうけて創設され、長沙尚徳街に社屋をおき、商人孫冀預を総経理、譚延闓・葉徳輝らと親密な関係にあった文人徐石禪・黄瀾父を総編集としてスタートした。まもなく『天声報』と改名する。その後に留日学生成本瑛が入社し、総編集となってまた『天民報』と改称した。

後も、依然として貧富の格差のある不平等社会であることに鑑み、将来その禍害が起ること（社会革命）を事前に予防する必要があるとして、民生主義を提起した。民生主義の綱領は平均地権であり、平均地権とは土地国有のことである²⁵⁾。つまり封建社会から一挙に社会主義社会へと飛翔する理論であり、民生主義は社会主義と同義語に理解されたのである。革命軍の総司令官として武漢攻防戦を指揮した黄興は1912年11月5日に湖南政界人による歓迎会の席上で、次のような講演をしている²⁶⁾。

政治革命が達成された今、その後の社会革命は避けがたい状況にある。欧米諸国では大資本家が国政を左右し、社会が不平等となり、革命風潮がそれにとまって起こっている。国家のことを考える場合、百年の大計が必要である。わが国では今のところそのような現象はないけれども、これを事前に防ぐ必要がある。中国は地大物博、地価の値上がり部分を税として徴収すれば、富強自立はただちに可能である。民生主義とはビスマルクのドイツが採用した国家社会主義のことであり、それは20世紀の立国の要である。

しかし社会主義やマルクスの学説等を早期に紹介し翻訳したこれらの人々は、大部分は小ブルジョア知識人であり、マルクス主義を信奉していたわけではない。かれらは西洋のブルジョア民主主義を学習し宣伝する過程のなかで、マルクス主義を新しい思想・文化の一部分、社会主義の一流派と考えて紹介し、翻訳したのである。しかもこれらの翻訳・紹介は、時間的に相互の関連性はなかったし、その内容も断片的なもので、さらには往々にして誤った解釈がなされてきた。したがって真のマルクス主義を流布させることは到底できなかったし、萌芽期にあった労働運動をはじめとする民衆の闘いに対しても実際の影響を与えることはできなかった。この状況はけっして偶然ではなかった。当時の中国における近代工業の発展はきわめて未成熟であり、労働者階級も自立できる力量をもって政治の舞台に登場してはいなかった。また孫文らのブルジョア民主革命運動も緒についたばかりであり、ブルジョア民主主義思想の宣伝・普及が当時の主要な思想的潮流であった。

湖南における経済と文化の発展は沿海地域に比べて遅かった。辛亥革命時期までに創設された企業は50をはるかに越えていたと思われるが、その多くは鉱業部門（湖南は鉱産資源の豊かな省の一つであった）であり、しかもそれらの工場は大半は手工業

25) 孫文「発刊詞」(『民報』創刊号, 1905年11月26日)。孫文の民生主義についての解説は、胡漢民「民報之六大主義」(同前, 第3号, 1906年4月5日)、馮自由「録中国日報 民生主義与中国政治革命之前途」(同前, 第4号, 1906年5月1日)によっておこなわれた。

26) 黄興「在湖南政界歡迎会上的演説」(湖南社会科学院編『黄興集』中華書局, 1981年) 295頁。

的な労働によるもので、操業と停止が繰り返えされていた。そのなかにあって近代的な企業と称され、比較的長く操業していたものは、湖南造幣廠・醴陵瓷業公司・華昌煉錫公司・湖南電灯公司・湖南黒鉛煉廠等の数企業にすぎず、産業労働者も1万人にも満たなかった²⁷⁾。さらに湖南は封建的保守的な風土の根強いところでもあった。このことは当時の湖南においてマルクス主義を含む社会主義を受容しうる階級的思想的基盤がきわめて脆弱であったことを示している。

3. 五四運動期について

湖南にマルクス主義が本格的に流布したのは五四運動期である。この当時、湖南の近代工鉱業はいちじるしい発展をとげつつあった。1912年から19年の五四運動期までに設立された、資本金1万元以上の近代企業は30を越えていた。そのなかにあって10にのぼる電灯会社の設立、中華汽船や湘江輪船等の設立、湖南銀行・儲蓄銀行・交通銀行の省内支店の開設、武昌＝長沙間の鉄道の開通等は、その後の湖南の近代産業発展の基礎となるものであった。それにともなって近代工場労働者は2万を越え、そのほかに鉱山労働者が10万から20万人、省都長沙（人口30万人）だけにかぎれば、人力車夫・港湾労働者等の雑業労働者が1万余、大工・左官職人が1万人を数えていた。また1915年の『新青年』の創刊によって上海・北京ではじまった新文化運動が、湖南では19年の五四運動の政治的経済的な闘いと表裏一体をなして広範にかつ深く進展し、湖南民衆の思想的な解放を飛躍的に促したのである²⁸⁾。このような状況がマルクス主義の湖南への普及にかなりの社会的思想的基盤をつくりあげたといえる。

毛沢東がかつて「11月革命の砲声がとどろいて、我々にマルクス・レーニン主義が送り届けられた」と述べたように、中国におけるマルクス主義の受容は、ロシア11月革命の影響から始まる。湖南では、革命の勃発から10日目、1917年11月17日『長沙大公報』が「俄京第二次政変記」と題する外電記事をいち早く掲載し、その革命を「ロシアの悲運」と論評し、その中核となった「兵工委員会」（ソヴィエト）を「烏合の集結」と批判した²⁹⁾。しかし『長沙大公報』のこの一連の記事は、「兵工委員会」がケレンスキー（克倫斯基）内閣を打倒した事実をおおいにかくすことはできなかった。

27) 拙稿「五四運動の諸前提—とくに湖南を中心として」（『鷹陵史学』第19号、1994年）参照。

28) 同前。拙稿「五四運動の思想的な前提と湖南—虚偽の偶像を破壊せよ（陳独秀）」（『鷹陵史学』第16号、1990年）参照。

29) 『長沙大公報』1917年12月16、17日「俄国政変中心之兵工委員会」。

もちろんロシア11月革命の全貌が把握されていたわけではないが、それは、軍閥・帝国主義の圧政の苦しみから解放される真理をさがしもとめていた湖南の知識人に新しい光明を与えた。新民学会³⁰⁾の代表として北京で留仏勤工儉学の情報を集めていた蔡和森は、1918年7月24日長沙の毛沢東のもとにおくった手紙のなかで、我らの目的は世界の何層もの網羅を突き破り、自由の人格、自由の地位、自由の功利を造り出し、レーニン（列寧）と茅原華三のしたことをさらに拡大することだと述べている³¹⁾。

時に1918年11月ドイツは連合国に降伏し、第一次世界大戦はおわった。北京大学教授李大釗は「公理が強権に勝利した」ことを祝う会で「庶民的勝利」と題する講演をし、さらに『新青年』に「BOLSHEVISM 的勝利」を書いた³²⁾。後者の論文において李大釗は、ドイツ軍国主義に対する勝利は人道主義・平和思想・公理・自由・民主主義の勝利であり、「社会主義」「ボルシェヴィズム」「赤旗」「世界の労働者階級」「20世紀の新潮流」の勝利であり、その功績はロシアのレーニン（列寧）・トロツキー（陀羅慈基）やドイツのマルクス（馬客士）らであるにとらえ、ロシア革命の思想的背景をも分析した。またボルシェヴィズムを「革命的社會主義」「ドイツの社會主義經濟学者マルクスを奉じて宗主となすもの」等々ととらえ、それはロシア革命とマルクス主義との関係を力説するものであった。毛沢東はこの時北京大学の図書館で仕事をしていた、李大釗と邂逅するのである³³⁾。

1919年4月北京から長沙にもどった毛沢東は、湖南五四運動の激動のなかで学生連合会を復活させて、排日・排日貨の罷課（学生ストライキ）をおこない、7月学連の機関誌『湘江評論』（8月上旬までに4号と臨時増刊1号を出版する）を創刊・編集して、運動の指導的役割をになった³⁴⁾。『湘江評論』第2-4号に連載した「民衆の大

30) 新民学会は長沙で1918年4月に組織された。参加者は当初は湖南第一師範の仲間を中心とした毛沢東・蔡和森・張昆弟ら14名であったが、20年末には70余名になったといわれる（李維漢「回憶新民学会」，中国社会科学院近代史研究所編『五四運動回憶錄』上，中国社会科学出版社，1979年所収）。

31) 蔡和森「蔡林彬給毛沢東」（湖南省博物館歴史部校編『新民学会文献匯編』湖南人民出版社，1979年）15-16頁。茅原華三は明治後期から昭和にかけての文明評論家で、『東北日報』をふりだしに、『自由新聞』『山形自由新聞』『長野新聞』『電報新聞』等の記者・主筆をへて、1904年『万朝報』に招かれ、海外通信員として欧米を回った。李大釗の初期の思想やマルクス主義受容のうえで大きな影響を与えた一人である。これについては石川直禎「李大釗のマルクス主義受容」（『思想』第803号，岩波書店，1991年）に詳述されている。

32) とともに『新青年』第5巻第5号（1918年11月5日）に載録されている。李大釗に関する研究書および研究史の概要については丸山松幸・齊藤道彦編『李大釗文献目録』（東洋学文献センター叢刊第10輯，1970年），後藤延子「日本における中国近代思想史研究」（『中国研究月報』第451号，中国研究所，1989年）等が便利である。

33) 毛沢東は1918年9月から19年4月まで北京に滞在した。毛沢東に関する略年譜については竹内実・和田武司編『毛沢東初期著作集 民衆の大連合』（講談社，1978年）の巻末の年表が便利である。

連合」のなかで、ロシア11月革命は「全世界を震撼させ」、その「怒濤」は世界の各国におよび、「大革命」を引き起こしたと激賞するとともに、歴史の変革にとって「民衆の連合した力」がいかに重要であるかを問うた。そこでは連合してどのような行動をとるかについて、ドイツのマルクス（馬克思）の一派とロシアのクロボトキン（克魯泡特金）の一派をあげ、次のように説明している。前者はきわめて激烈で、目には目をの方法をとって命懸けで対決するのに対し、後者は温和で、効果をあせらず、まず平民に理解させることから着手し、誰もが互助の道德、自発的な仕事をもつことをもとめ、貴族であろうが資本家であろうが、人に害を与えず、人に役立ちさえすれば、殺す必要はないとする、と。これは毛沢東がマルクスにはじめて言及したところであるが、この段階の毛沢東にあってはマルクスよりクロボトキンの思想にウェイトが置かれおり、マルクス主義が革命推進のための唯一の理論として選択されてはいない³⁵⁾。また同じ『湘江評論』のなかで当時の湖南軍閥張敬堯らがボルシェビキやマルクス主義・アナキズム等を過激党・過激主義と称して弾圧したのに対し、毛沢東らは、過激党についての研究を深め、「(過激党は)洪水・猛獣にひとしい」とか「ボイコットせよ」「拒絶せよ」等の空言に迷わされてはならないと訴え、過激派を「命を賭けて国を救おうとする志士」と規定した³⁶⁾。『湘江評論』発禁後、毛沢東は『新湖南』（湘雅医学校学友会機関誌、6月14日創刊）に執筆の舞台を移し、7号から停刊させられる10月まで編集を担当した。『新青年』7巻1号（1919年12月1日）によると、『新湖南』は『湘江評論』の化身と評され、そのなかの論考「社会主義是什麼？無政府主義是什麼？」は高く評価された³⁷⁾という。その後1919年から22年にかけては『長沙大公報』に執筆の場をもとめて活動した³⁸⁾のは周知のことである。

五四運動のなかで雑誌・新聞等が新文化運動の高揚、新思想の流布に果たした役割は大きかった。当時長沙にあって省外の新出版物の流入の窓口となったのは、『体育週報』社の黄醒（楚怡小学教員、新民学会会員）、育英学校の胡博蘇、群益図書公司であり、そこでは『新潮』『新青年』『建設』『解放与改造』『新中国』『新生活』『少年中国』『星期評論』『新社会』『平民』『教育潮』『心声』『晨报』『上海時事新報』『救国

34) 拙稿『湖南五四運動小史』（京都大学人文科学研究所共同研究報告『五四運動の研究』第5函第16冊、同朋舎、1991年）を参照のこと。

35) 毛沢東がマルクス主義を受容した時期については中村公省「毛沢東主義の原型」（加々美光行編『現代中国の挫折文化大革命の省察』アジア経済研究所、1985年）参照。

36) 『湘江評論』第2号（1919年7月14日）「研究過激党（〈毛〉沢東）」、同3号（同年7月28日）「那一個是過激？（〈陳〉子博）」。

37) 『新青年』第7巻第1号「長沙社会面観」。

38) 村田雄二郎「長沙『大公報』について」（『東方』第21号、東方書店、1982年）には毛沢東の執筆記事の一覧が掲載されている。

日報』等が販売されたという。そのうちもっとも人気のあったのは『新青年』（湖南での発売部数300部）、『新中国』（200余部）、『建設』（100余部）、『解放与改造』（100余部）で、長沙で取り扱った雑誌販売部数は1000余部にのぼった³⁹⁾という。ここにも社会主義を含むあらゆる新思潮が湖南に流入してきている様子がうかがえる。

五四運動の開始の1919年はマルクス主義紹介の幕開けの年でもあった。『晨报』『新青年』『毎週評論』『共産党』等の刊行物上に、マルクス主義を宣伝したり、共産党の知識やロシア革命を紹介する文章が陸続とあらわれたのである。『晨报』は19年4月1-4日の淵泉訳「近世社会主義鼻祖馬克思之奮闘生涯」（原著河上肇「マルクスの『資本論』、『社会問題管見』1918年所収）をかわきりに、「日本之馬克思研究熱」（24日）あるいは「労農政府治下之俄国实行社会共産主義之俄国真相」（10日より）、志希訳「俄国革命史」（著者塞克，19日より）等を連載し、5月以降連日のようにマルクス主義およびロシア革命に関する紹介・翻訳の記事を掲載した。9月発売の『新青年』も6巻5号（奥付は1919年5月1日刊）は李大釗の「我的馬克思主義観」を始めとするマルクス主義の特集号を組み、従来の新文化運動啓蒙雑誌からマルクス主義宣伝雑誌へと転換していった⁴⁰⁾。『毎週評論』は第16号（19年4月6日）の名著紹介の欄に舎訳「共産党的宣言」（『共産党宣言』の抄訳）を載せた⁴¹⁾。当時の湖南の新聞紙上にもきわめてわずかではあるが、社会主義運動の指導者やかれらの観点を紹介する記事が掲載された。その一つに1919年7月4-9日の『長沙大公報』に連載された「社会主義両大派之研究」なる記事がある。そこではたとえばマルクスの学説について「科学的方法に基づいて立論した社会主義である」と論評、「田畑・鉱山・銀行・鉄道および各原料」を含む「生産用具のみが公有」、「その他の物品で消費に供されるものは皆私有」の社会と紹介した。しかし資本の公有については、平和的な方法で「どこでも同じように実行できるわけではない」ので、最後の方法として「革命」が必要であり、

39) 『時事新報』1919年10月25日「湖南新思潮之発展」、『晨报』同年11月25日「長沙特約通訊」、『長沙大公報』1920年1月10日「禁止伝播新書」。『長沙大公報』の記事によると、漢口で押収された『体育週報』社宛の新刊書は710冊、胡博蘇宛が300冊、群益図書公司宛が60冊であったという。

40) 藤田正典「新青年10年の歩み」（藤田正典・久保田文次・嶋本信子編『新青年別巻新青年総目録 五四運動文獻目録』汲古書院，1977年）参照。

41) 『共産党宣言』に関する中国語訳についていえば、『天義』第15期（1908年1月15日）、第16-19の合冊（同3月15日）にエンゲルスの序文と第1章が民鳴によって訳載された。これは『社会主義研究』第1号（906年3月15日）の日本語訳（幸徳秋水・堺利彦共訳）からの重訳である。それに続くのがこの『毎週評論』による第2章後半の抄訳である。単行本としては陳望道の全訳（初版）が1920年8月に社会主義研究社から出版された。その翻訳にあたっては前述の『社会主義研究』の日本語訳を基礎とした考えられる。石川直植「マルクス主義の伝播と中国共産党の結成」（前掲）参照。

階級闘争はいずれにせよ避けられず、マルクスの見解では階級闘争によらねばならない、と論じた。

マルクス主義の原理が湖南に広範に流布しはじめるのは、1920年秋以降である。その普及に大きく貢献したのは、毛沢東・彭璜・易礼容ら新民学会会員の創設にかかる文化書社の活動をあげることができる。1920年9月正式に営業を開始した書社（当初は長沙潮宗街湘雅医学校の部屋を借り受けて社屋とした）は、新文化・新思想・新研究を供給する材料を迅速かつ手軽な方法で湖南の青年や進歩的な知識人に提供することにあった⁴²⁾。成立後わずか半年で、上海・北京・広州・武漢・南京・福州・成都・蘇州等の60余りの単位と業務関係をもち、省内でも平江・武岡・宝慶・衡陽・寧郷・瀏陽・溆浦の7分社をもち、城内の第一師範学校・同付属小学・楚怡小学・修業学校等にも販売部をおいた。当時もっとも頻繁に業務関係をもったところは、新青年社（広州）・泰東書局（上海）・亜東図書館（上海）・利群書社（武昌）・北京大学出版社・北京晨報社・北京学術講演会等であった。発足当初の52日間で取り扱ったものは書籍164余種、雑誌45種、新聞3種であったが、到着と同時に完売したという。開業から7か月で、200冊以上売れたものに『馬克思資本論入門』『杜威五大講演』『克魯泡特金的思想』『試験論理学』『晨報小説』第1輯、100部以上売れたものに『社会主義史』『現代教育之趨勢』『動的新教授』『社会与教育』『蔡子民言行録』『迷信与心理』『托爾斯太伝』『教育哲学』『哲学史』『新標点儒林外史』等があり、雑誌・新聞では『労働界』（5000部）、『新生活』（2400部）、『新青年』（2000部）、『少年中国』（600部）、『平民教育』（300部）、『少年世界』（240部）等がよく売れ、『時事新報』が毎日75部、『晨報』が同じく45部さばかれた⁴³⁾という。かれらの取り扱ったものは多くは社会科学の分野の書籍で、その内容もマルキシズムあり、アナキズムあり、プラグマティズムあり、中国の小説ありというように多種多様であり、当時の湖南の青年や知識人の新しい思想・文化に対する食欲さや要求の切実さがうかがえる。いずれにせよ、文化書社は、五四運動における民衆の意識の高揚を背景に、その販売網を通じて湖南省内に新思想を浸透させ、民衆のさらなる闘いを促進する役割をになったといえる。時あたかも民衆の大連合によって客軍閥張敬堯が追放され（20年6月）、「湖南人の湖南」を標榜して入湘してきた譚延闓・趙恒惕の支配のもとで、湖南自治運動が広汎な民衆レベ

42) 『長沙大公報』1920年7月31日「発起文化書社の縁起」。

43) 「文化書社第1次営業報告 1920年10月22日」「文化書社社務報告 第2期 1921年4月」（張允侯・殷叙彝・洪清祥・王雲開編『五四時期社団』1，生活・読書・新知三聯書店，1979年）52-65頁。

ルの闘いを背景に高揚し、趙恒惕の主導によるとはいえ湖南省憲法が成立した（22年1月）。

新思想の湖南への流入は、マルクス主義を含む社会主義のみならず、ブルジョア的な新思想の到来をも意味した。五四運動の前夜にアメリカのプラクマティズム教育思想家ジョン＝デューイ（杜威）が中国を訪れ、胡適や陶行知らをともなって11省で講演・講義活動を2年余にわたって展開した。またイギリスの哲学者で数理論理学者であるバートランド＝アーサー＝ウィリアム＝ラッセル（羅素）も、激動する革命ソヴィエトを歴訪したのち中国に入り、1920年10月上海をかわきりに21年にかけて各地を講演してまわった。20年10月にデューイとラッセルがともに湖南に招かれて講演をおこなった。かれらの熱弁が、新文化運動や五四運動のなかで新知識の解放を感受した学生や教員、女性をはじめ湖南各界の進歩的な人々に深い感銘を与えたことは当時の『長沙大公報』の記事から推察できる。デューイの講演は8回、12時間におよび、延べ7000人の聴衆を集めた⁴⁴⁾という。しかしかれらの主張はやがてマルクス主義と鋭く対立することになる。ラッセルは、理論からいえば、共産制のもとめる理念はきわめて高いが、現実からいえば、今の中国でおこなうことは有利ではないし、時期尚早、今の中国が進むべき道は資本主義の発展であるとし、また工業・経済が発展し、教育が充実すれば、共産制をおこなっても実益があると主張した⁴⁵⁾。かれと同行してきた張東蓀は、ラッセルの考え方を社会改造論ととらえて、それを肯定した。社会改造のためには幸福の指標である自由・平等・向上（進歩）を均等に発展させることだとし、現在のマルクスの学説は、政府の集権を主張して国家主義の色彩が強い、この考え方を行使すれば専門的な人材が乏しくなり、精神文明と物質文明はともに発展させることができなくなるといい、またこの考え方は統一を強行しようとするから、反対をゆるさず、人民の自由を犠牲にすることになると説いたのである⁴⁶⁾。

一方デューイは、教育の改革による社会の改造を説き、平民教育と教育との関係について講演した。その特質は個人主義の重視つまり自発的・能動的で創造性や判断力を持つ人材の育成をめざすこと、校長・教員・学生の共同作業の習慣を養成し、ともに働き、ともに利益をえること、また平民教育を普及して労働者に余暇を利用して頭脳を使う機会をもち、精神生活における快楽をえさせること等にあった。結果として

44) 湖南長沙におけるデューイ、ラッセルの講演活動（日程、演題、通訳等）の詳細は、森本正一「日中の教育比較論—デューイの影響を中心として」（『佛教大学教育学部論集』第5号、1994年）60-64を頁参照のこと。

45) 『長沙大公報』1921年1月9日「羅素講共產主義与中国」。

46) 『長沙大公報』1920年11月4日「對於社会改造之管見（統）」。

平民教育運動を大きく進展させていくことになるのであるが、そこには労働者の地位向上とその権利の正当性を要求する「過激主義」の台頭に対する抑止の意図があった⁴⁷⁾ことに留意しなければならない。

こうした潮流のなかでマルクス主義の湖南への流入は、新民学会のメンバーを中心におこなわれていった。新民学会はその設立当初の性格からいっても、会員相互による学術・品性の切磋琢磨を重視したので、研究会の活動は盛んであった。毛沢東は1918年6月には長沙岳麓山に半耕半読の「新しい村」づくりを計画したり⁴⁸⁾、19年9月には「問題と主義」論争の影響をうけて問題研究会をつくり、民衆の大連合、社会主義、労農政府、留学生派遣等々の問題を考えようとしていた⁴⁹⁾。20年8月には俄羅斯研究会を組織し、革命後のロシアの思想や実情を研究することを目的とし、ロシア叢書の刊行、ロシアでの実情調査、留俄勤工儉学の提唱を会務とした⁵⁰⁾。それはかれらのマルクス主義やロシア革命に対する関心の強さを示すものであった。メンバーの一人で湖南学連の元会長彭璜は、ロシアは11月革命以後、内部の反対党や強権主義の協約国に対する対応を迅速におこない、北氷洋岸の広い大地を根本的に改造した、これは「マルクス経済学の産物」である⁵¹⁾、と称讃した。

毛沢東ら新民学会会員は、当時「世界と中国の改造」の方法をめぐる激しい論戦を続けていた。フランス在留の会員によるモンタルジーでの会議(1920年7月)では、蔡和森らは共産党を組織してマルクス(馬克斯)・ロシア(俄国)式の革命による改造、すなわち階級闘争とプロレタリア独裁を主張したのに対し、蕭子昇・李維漢らは無政府・無強権のブルードン(蒲魯東)式の温和な革命による改造を提起していた⁵²⁾。これに対し20年12月毛沢東はかれらへの書簡のなかで、ブルードン式の温和な手段で全体の幸福をはかることは真理においては賛成であるけれども、事実上不可能である、

47) 小林善文『平民教育運動小史』(前掲『五四運動の研究』第3函第10冊, 1985年)参照。

48) トルストイの汎労主義、武者小路実篤の「新しき村」の影響をうけたもの。蕭效欽「五四運動前後毛沢東同志の思想発展」(中国社会科学院近代史研究所編『紀念五四運動六十周年學術討論文選』3, 中国社会科学出版社, 1980年)63-64頁, 湖南省哲学社会科学研究所哲学研究室編『毛沢東早期哲学思想研究』湖南人民出版社, 1980年)104-105頁。

49) 主として胡適と李大釗の間でおこなわれた論争で、胡適の「問題を多く研究し、主義をあまり語るな」(『每週評論』第31号, 1917年7月20日)というのに対し、李大釗は「再び問題と主義を論ず」(同前, 第35号, 同年8月17日)で、主義を空談することの非を認めつつ、社会問題を解決しようとするならば、民衆の力によらねばならず、民衆を組織しようとすれば共同の理想、主義は不可欠であると批判した。いわばプラグマティズムとマルクス主義の対立でもあった。李銳『毛沢東の早期革命運動』(前掲)247頁。

50) 『長沙大公報』1920年8月22日「組織俄事研究会」、同8月23日「俄羅斯研究会成立」。

51) 『長沙大公報』1920年8月27-30日「對於發起俄羅斯研究会的感言(蔭柏)」。

52) かれらと毛沢東間の往復書簡のなかに記されている。その書簡は「新民学会通信集」第3集〈1921年1月31日出版〉(前掲『新民学会文献匯編』)に収録されている。

またラッセル（羅素）のというような教育の方法でブルジョアジーを善導することもできない、したがってやむをえざる方法として蔡和森らのロシア式の革命による改造に賛意を表明した⁵³⁾。これをうけて長沙の新民学会会員たちは21年1月1日から3日間、文化書社で新民学会会員の会議を開いた。ここでは14項目にのぼる問題が討議されたが、もっとも重要な課題は、共同目的と、革命の方法、当面の活動方法であった。第1の共同目的については、中国と世界の改造なのか、世界の改造なのか、東亜の改造なのか、また改造なのか改良なのかをめぐって議論がなされ、表決の結局「中国と世界を改造する」ことになった。第2の革命の方法でも、表決によってボルシェヴィキ（波爾維克）主義をとることになり、デモクラシー（徳謨クラ西）、温和な方法の共産主義を排除した。第3の活動の方法では、研究を重視するのか、研究・宣伝・組織・連絡を並行しておこなうのか、また労働運動の実践活動を重視するのか等の問題について白熱した議論が展開されたが、結局議論を総て盛り込む形でまとめられた⁵⁴⁾。この討論を通して、新民学会会員相互の考え方の相違が明らかとなり、あの「問題と主義」論争を根底とする対立、マルキンズム、アナキズム、ラッセルのとく社会主義等の理論的な対立等々が複雑に絡み合い、その矛盾はいっそう拡大されていった。

こうして新民学会はその使命をおえる時が近づいてきた。毛沢東らは、ロシアのボルシェヴィキのような革命組織をつくり、労働人民にマルクス主義を学習させ、マルクス主義と労働運動を結合させることに留意しはじめた。たとえば先の新民学会の会議では、何叔衡は、マルクス主義の普及はまず労働者と兵士から着手することを提起したし、陳章甫は、そのために夜学を多く開設し、労働界・女界に波及させることを主張した⁵⁵⁾。毛沢東は社会主義青年団の結成につとめ⁵⁶⁾、やがて21年7月共産党の設立に参加していくことになり、かれの活動も新民学会から党へと移り、労働運動と密接な関わりをもつにいたる。かれらが労働大衆のなかへ深く入り、マルクス主義を用いてかれらを啓蒙し、それによって労働者の自覚と組織性を高めていったのである。

4. むすびにかえて

辛亥革命期から五四運動期における、湖南への社会主義の伝播の過程について述べ

53) 同前。

54) 「新民学会会務報告」第2号〈1921年夏刊〉（前掲『新民学会文献匯編』）。

55) 同前。

56) 1921年1月の新民学会の会議で社会主義青年団の組織化が提起されいているので、結成はこの時以後ということになる。「新民学会会務報告」第2号（前掲）参照。

てきた。その過程はロシア11月革命を契機に2段階にわけることができる。11月革命以前の時期は、湖南の少数のブルジョア・小ブルジョア知識人が、西洋のブルジョア民主主義の学説を大いに宣伝するなかで、マルクス主義を含むさまざまな社会主義の思想について断片的に翻訳・紹介した時期である。11月革命の勝利以後とくに五四運動時期は、マルクス主義が湖南の先進的な知識分子に受容され、労働運動と結合しはじめた段階である。それぞれの段階における社会主義の伝播・受容の経過についてまとめは必要としないであろう。ただ中国共産党と湖南支部の成立以後、マルクス主義は湖南の党組織を通じ、さまざまな方法で、かつ中国の国情と革命の実践とを結合させながら、さらに広範に伝播し、湖南の共産主義者の第一世代を育成し、湖南の労働運動の第一次の高揚期をむかえ、湖南の民衆の革命闘争の基礎を築きあげたことを指摘しておきたい⁵⁷⁾。

57) 小論は、本学総合研究所の研究班「アジアのなかの日本」(1992, 93年度)および本学学術委員会の個人研究助成「近代中国における外来文化の受容について」(94年度)の研究成果の一部である。